

Doris Lessing の *African Stories*

について

大野 佳代子

序

「Doris Lessing は、現代の英国作家の中で、社会を改革しようという積極的な信念に、もっとも激しく身を委ねている作家である。」⁽¹⁾と、かつて James Gordin が評したが、個人の生き方が如何にその環境からの影響を強く蒙るものであるかということに関して、彼女自身の場合を考える時クローズアップされてくるのは、アフリカである。「アフリカで育った作家には、現代の戦場、つまり、急速にしかもドラマティックに変化し続ける社会の、真っ只中に身を置いているということ、数多くの有利な点があるが、このことは同時にまた、ハンディキャップにもなっている。来る日も来る日も、人間の残酷さをいやというほどみせつけられ、いつも決まって烙印のように浮かび上がってくる不公平というものの存在を、日に幾度となく思い出させられる——こんな暮らしはうんざりです。」⁽²⁾これは、Doris が或る短篇集の序文で語っている言葉である。

彼女がアフリカを評して言った〈現代の戦場〉という表現の伝えるイメージは、強烈である。第二次世界大戦後、特に60年代に入ってから、アフリカ大陸の国々は相次いで独立を宣言し、黒人は主権を獲得していったが、独立に至る過程は茨の道であったと思われる。一方、南アフリカ共和国の如く、断固としてアパルトヘイト政策を実行し続ける国もある。こうした歴史を踏まえてみる時、〈現代の戦場〉のイメージは自ずから鮮明になってくるし、また、その地で罷

り通っていたであろう、種々の非道、不公平についても想像に難くない。

Doris が両親とともに南ローデシアに移住したのは1925年、5才の時のことであった。〈現代の戦場〉アフリカでの彼女の生活がどのようなものであったか。これについては、“Children of Violence”によって、推察することができる。彼女は、あまりにも不公平なアフリカ社会の現実、白人と黒人の生活環境の甚だしい落差に、強い憤りを感じた。白人の黒人に対する暴力が日常的であることを嘆き、これを何とかしたいという思いが発端となって、この5部作を書いたのだと、彼女は Roy Newquist とのインタビューの中で語っている⁽³⁾が、主人公の Martha Quest は、殆ど Doris その人を思わせる人物として描かれており、自叙伝の様相の強い作品である。「ドリス・レッシングの小説は、彼女の生活を源泉としている」と F. Howe が述べたが、作家 Doris Lessing はアフリカを抜きにしては、語れないと言っても、過言ではないであろう。

本稿では、アフリカを舞台にした小説 (*African Stories* と総称する) に描かれるさまざまな男女の、アフリカへの対応ぶりを通して、彼女の〈環境と個人〉観に、アフリカがどのような影響を及ぼしたかについて、考察してみたい。

I

まず Doris 一家が移住した南ローデシアについて、その概略をみることにしよう。

南ローデシアという国名は今では地図上のど

こにも存在しない。1980年、この国はそれまでの少数白人の支配による政府から、圧倒的多数民族である黒人主体による政府へと変革し、それと同時に国名も正式にジンバブエと改められたからである。

南ローデシアとイギリスとの関わりは、ダイヤモンド王と言われたイギリス人セシル・ローズがイギリス南アフリカ会社を設立し、1890年にローデシア（これは開拓者 Rhodes の名に由来し、「ローズの家」の意である）という植民地を設定したことに始まる。第一次大戦直後に、植民者による自治政府要求の聲が高まり、イギリス政府はその期待に応えるべく、イギリス南アフリカ会社から行政権を得、1923年この地は「南ローデシア」という名の、イギリス政府管轄下の自治植民地となった。

イギリスでは既に19世紀初頭に、非白人の人権尊重運動が強く起こっており、当時の人々の南アフリカに関する世論の高まりをもとに、1828年、33年と相次いで奴隷解放令が決議され、38年にはケープ植民地の全奴隷を自由人とならしめた。しかしこれによって、アフリカ奴隷の虐待、酷使に慣れきっていたボーア人（南アフリカ内陸部に住む、オランダを主とするヨーロッパ大陸系移住者の子孫）は、経済的に大きな打撃を受け、イギリスに反逆心を抱くようになった。以来、イギリスに対する彼らの敵愾心はその完璧なまでの黒人蔑視、白人至上主義とともに、子孫であるアフリカーナに受け継がれてゆく。

1948年に南アフリカ連邦に、アパルトヘイト政策を公然と掲げるアフリカーナ国民党政権が出現してからは、イギリス系白人植民者は、その影響が北上してくるのを警戒したと言われる。南アフリカ共和国は、その徹底した人種差別政策により、今では全世界的に悪名高い存在となっているが、この政策を推し進めたアフリカーナの意識と行動は、*African Stories* に於いて、しばしばイギリス系白人植民者のそれと、対比的に描かれている。

African Stories には、Doris 自身の父親と同じように、イギリスでの生活を捨て、開拓者と

しての意気込みにあふれて、未墾の地にやってきた男たちが多く登場する。これらイギリス人植民者のアフリカへの反応は、男たち・妻たち・子供たちと、三者三様であり、その意識と行動は、実に対照的なものとして描かれる。「人の心がどのように変化していくか、現実への認識の仕方がどのように変わっていくのか、ということに何よりも関心を惹かれる⁽⁵⁾」と語る Doris が、アフリカの地に生きる男女を、どう描いているかをみることにしよう。

II

Doris の父親は、1925年ロンドンで開かれた帝国博覧会でのポスター〈一袋25シリングのトウモロコシで簡単に一財産作れる〉に心を奪われて、即座に南ローデシア移住を決意した⁽⁶⁾という。

だが、アフリカでの現実には、彼が夢みたほど甘くはなかった。メイズ一袋の価格は、25シリングから9シリングに暴落。天候に翻弄され、価格は勿論のこと、穀物それ自体が、壊滅的打撃を受けることも度々であった。一方で、500人ほどの黒人を月12シリングで雇い、しかもその連中ときたら誰一人、自分がどんなことをすればよいのか、まるで分かっていない。ヨーロッパから来た農場労働者であれば、1日で出来ることを、これらの無知な黒人労働者たちは、20人かかっても、1週間は要するという有り様であった。「公平な主人⁽⁷⁾」(‘just employer’) だと皆から言われることを、誇らしく思っていた Doris の父親が、アフリカの自然と人間を相手に、したであろう苦労は、*African Stories* にさまざまな形で表れる。

アフリカが如何に凡人の想像を絶する厳しい環境であるかは、“A Mild Attack of Locusts” に端的に描かれている。これは或る日突然襲来したイナゴの大群を相手に、白人農場主一家が必死に被害を食い止めようと防戦するさまを、緊迫した雰囲気の中に、描いたものである。

かつて Doris は *The Story of an African Farm* という小説に寄せる後文の中で、「自然とい

う巨大な力の手中にあっては、人間は実に小さなものであり、人間は善も悪も超越した不可解なものを、何とか理解しようと、ただひたすら求め、もがき苦しむだけなのです⁽⁸⁾と語ったが、“A Mild Attack of Locusts”は、まさにこの、彼女の言葉を実感させる。「空が真っ暗になり」、⁽⁹⁾「そこら中を這い回るイナゴのために、まるで大地が動いているように見えた。びっしりと群れるイナゴで、地面を見ることは全く、出来なかった。」(MAL, p.115)この気の遠くなるようなイナゴの大群を前に、人間に出来ることと言えば、ただ「彼らが自分の所を素通りし、よその農場に行ってくれるように」(MAL, p.113)祈り、火を焚いて煙幕を張り、ありとあらゆる缶を打ち鳴らして、その騒音で牽制することだけ、なのである。それは何と、哀しい痛ましい光景であろう。アフリカでの生活は、絶えざる戦いの連続である。「もし天候が悪くなければ、今度はイナゴに襲われる心配をしなければならない。イナゴの心配がないと、次はアワヨトウの幼虫か、草原の火事にきつと悩まされるのだ。いつでも必ず、何かしら危難が出来る。」(MAL, p.117)

以前、ローデシアのスミス政権を支持する白人農場主が「アフリカ人は、知的・精神的・道徳的に我々と同等であり、300年の関係を経るうちに、彼らは我々の道徳律とキリスト教に信頼を置くようになったと考えられる。それならばアフリカ人が自分で種をまいたわけでもないものに権利を主張できない、という道徳律だって容易に理解できるはずである。アフリカ人が現在所有しているものに加えて、さらに白人が創造したものを譲渡しなければならないのだろうか。答えは明らかに『否』である⁽¹⁰⁾」と語ったということだが、アフリカでの苦闘の日々を思い合わせると、この主張にも無理からぬ所があるように思われる。

アフリカでは白人の敵は恐るべき自然だけではなかった。黒人の「狡猾な無知⁽¹¹⁾」にも不断に悩まされなければならなかった。“The Pig”では、苦労の甲斐あって、見事な実りをみせてきたトウモロコシの穂軸を、夜の間掠め取ってゆく黒人に手を焼いた、農場主の話が紹介され

る。彼は見張り役の老黒人に、ライフル銃を渡して言う——「いいか、ジョナス。今年は、お前が見るものはすべて撃つんだ。何でもだぞ。鹿も、ヒヒも、豚もだ。ものおとがしたら、何でも撃ってしまえ。それが何かを、確かめる必要はない。いいな⁽¹²⁾」ここでは、もはや人間は、人間でなくなってしまう。アフリカでは自然に対しては、人は為す術もなく、ひれ伏し、ただその風向きが変わるのを待つだけであるが、人間(黒人労働者)に対しては、信じられないほど冷酷になれるのである。その昔、ポーア人が「文明から、そして地方の文化的中心地から離れてゆくにつれ、書物の世界や、変化していく思考の世界を放棄した⁽¹³⁾」ように、人は「あるのは肉体のみ。心を無にして、ただひたすら働くだけ⁽¹⁴⁾」でなければ、挫折を免れないのであろう。

III

このような苛酷な環境、アフリカという「この暗く貧しい地」(SH, p.95)に生きる白人の、ひとつの典型を表わしていると思われるのが、“The Second Hut”の主人公、Carruthers 少佐である。

少佐は、40才を過ぎて後に初めて、農場経営を思い立ち、家族を伴ってアフリカに移住してきた退役イギリス軍人で、この小説は、彼が失敗と焦燥を重ねた挙げ句、失意のうちに英国へ戻る決心をするまでの経過を語ったものである。不連続きで傾ききった農場経営を立て直すべく、少佐が雇ったひとりの若いアフリカーナ。彼の存在は、少佐と強いコントラストを成すものであり、少佐が彼のために実行した〈第二の小屋〉作りをめぐる展開される、少佐とアフリカーナ、黒人使用人たちとの間の心理的軋轢が、ストーリーの主軸となっている。

Dorisの父親は除隊後、イギリスの固苦しさ、偏狭さを嫌い、その息苦しさから逃れるためにペルシアへ渡り、更にもっと自由を求めて、アフリカへと謂わば逃れていったのだが、次に引用する、作品冒頭で紹介される Carruthers 少佐の姿は、その経歴は勿論のこと、人柄と云い、

風采と言ひ、殆どあらゆる点で、まさにこの父親のイメージとオーバーラップするものである。

彼は自分を軍人だとは考えていなかった。がっしりとし、唇を固く結んだ、きびきびとした外観の中にも、優しさ或るいは緊張感を窺わせるものがあった。それは自分が理解していないということを知られるのを恐れている、耳の不自由な人がみせるような、チラッと浮かんですぐ消える微笑と、不安そうな眼つきの中に表れていた。(SH, p.75)

ここでは、性来軍人向きではないという、少佐の人間性の一端が、彼の表情・眼差しを通して語られるのであるが、少佐の人間性は、先述したように、アフリカーナという強いコントラストを得て、この物語のプロットに於ける重要な要因となっている。

上記引用文から暗示される、少佐の軍人向きでない資質とは、どのようなものか。それは一言で言えば、少佐のもつ本質的なやさしさであろう。つまり、他人を、その人格・人権を無視して、号令ひとつで意のままに従わせようとする、或るいは逆に、社会階級的に自分より上位の人間の要求することであれば、たとえそれがどんなに理不尽なことであろうと、無抵抗に従ってしまう、そのような感覚を持つことに対して、平静ではいられない人間性を、少佐は本質的に有しているのである。彼のこのようなやさしさが、彼の不幸を増大させ、彼の人生を破綻に導いてゆくことになる。彼が性来のやさしさを持って、誠実にひたむきに努力すればするほど、アフリカはまるで嘲笑うかのように、彼を翻弄し挫折と絶望の淵へと、追い込んでゆくのである。

少佐ときわめて対照的に描かれるのが、アフリカーナの Van Heerden である。少佐を善とするなら Van は、悪の象徴と言ってもよいであろう。彼はまさに、その昔アフリカ土着の原住民を人間とはみなさず、虐待・酷使するのを当たり前としていた先祖ボーア人の、徹底した非白人蔑視の伝統を具現する者として登場する。彼が現れると途端に、少佐のもつ本来好ましいはずの人間的なやさしさは、色あせたものとなっ

てしまう。いかにも弱々しく、歯痒く、頼りない印象へと変わってしまうのである。つまりはそれほどに、この Van は強烈なイメージを与える存在となっている。

次に示すのはいずれも、少佐の人間性を端的に表すエピソードである。

① 彼らのことが、彼の頭から離れなかった。

彼は夢にまで見た。やがて、彼の眠りを恐怖でみたすのが、果たして彼自身の子供たちなのか、それとも例のオランダ人の子供たちなのか、分からなくなってきた。(SH, p.84)

これは、独身でも狭いと濟まなく思っていた小屋に、Van の一家11人がひしめき合って住んでいるのを知ってから、少佐の煩悶を示す一文である。彼は妻子のいることを隠していた Van を責めるよりも、むしろ逆に自責の念に駆られるのである。「こんな惨めな状態で暮らすのは、一体どんな気がするだろうと想像して、不愉快になった」(SH, p.81) 少佐には、もはや Van の家族のことを放っておくことは、出来なくなってしまう。

② 彼の農場でもう12年も働いている黒人の使用人頭が、彼の返事を待っていた。彼はまさに瀬戸際に立たされたのである。一瞬彼は、オランダ人を解雇することを考えた。しかし、自分にはそれは到底出来ない、彼には分かっていた。そんなことをすれば、一体あの子供たちはどうなるのか。彼は、気が進まないことだが、黒人たちの同情心に訴えることにしようと、心を決めた。(SH, p.84)

これは、「彼らを犬同様に扱う」(SH, p.84) Van のやり方に、不満を募らせた黒人労働者たちのボスが、少佐に直訴する場面である。Van を辞めさせなければ、自分たちが出て行くと言う彼らに対して、少佐は農場の経営状態を話し、Van の力が必要なこと、少なくともこの窮状を脱するまでは何とか我慢して協力してほしいことを、頭を下げて頼む。妻子持ちのアフリカーナを雇ってくれる所はない。少佐には、9人もの子を抱えた Van を放り出すことはできなかったのだ。Van 一家のために、妻が病気であることまで持ち出して、黒人たちの同情を買おうとする少佐

の姿を、もし当の Van が見たら彼は何と言うだろう。

③ カルーサーズ少佐はその日曜日、黒人たちが小屋を建てるために彼らの住まいからやってくるのを、夜明け前から待っていた。彼は Van 一家が目覚める前に、もうそこに来ていた。もし自分がいなかったら、何か悪いことが起こるのではないかと、心配だったからである。彼は、黒人たちのやる気のないだらした態度に、Van が腹を立てはしないかと、気をもんでいたのだ。(SH, p.88)

煩悶の末、少佐は Van 一家のために急いでもう一軒小屋を建てることを決意する。一年の中でもっとも忙しい時期、早急に直さなければならない柵、今すぐ収穫をしなければならない畑、情け容赦のない Van の監督の下で、休日も返上して働かされ、疲れきっている黒人たち、等々、困難な状況の中で、なお且つ、少佐は小屋を建てることを「自明の義務」(SH, p.84)だと考えたのである。2時間以上待って現れた黒人たちを、彼は内心の怒りを抑えて迎える。「何と言っても、今日は日曜日だ。おまけに彼らは、もう何週間もずっと休みなしでできているのだ。」(SH, p.89) 少佐には彼らを責めることは出来なかった。

この少佐のやさしさ、人の好きに比して、Van の見せる非人間性は徹底している。交渉が成立した後、少佐から受けた食事への招待をにべもなく断わる彼の態度には、暖かみとか連帯感といった人間的な感情はかけらもなく、ただビジネスライクに徹した、まるで機械のような冷たさのみを感じさせる。次に引用する文は、少佐に案内されて、クモの巣だらけの小屋に入ってしまった時のエピソードであるが、少佐と Van のこのような対照的な人間性を、最も鮮かに象徴するものである。

カルーサーズ少佐だったら、そんなことをするくらいなら死んだ方がましだと思うようなことを、ヴァン・ヒールデンはやってのけた。彼はくもの巣を素手で引きちぎり、くもを指で握りつぶした。そして無頓着に壁に手をこすりつけて、べっとりとくっついた絹のような糸と、ぐちゃぐちゃにつぶれたくもを拭った。

「ここで結構だ」と彼は言った。(SH, p.79-80)

Van は家畜を扱う術を心得た、農場管理者としては非常に有能な男であったが、赤い眼を爛爛と光らせて身構えているクモを、顔色ひとつ変えずに握りつぶして平然としていたように、黒人労働者たちに対しても冷酷無比であった。少佐の苦心の末にやっと建った〈第二の小屋〉は、この Van の冷酷な仕打ちを恨んだ黒人の放火により、あっけなく消え去ってしまう。

しかし、黒人のこの裏切り行為より、もっと致命的に少佐を打ちのめしたのは、Van のタフさ・したたかさではなかったろうか。火事で彼の子が一人焼死するが、黒こげになった遺体をその夜のうちに手早く埋葬し、子を亡くしたショックで予定より早く産気づいた妻の陣痛の声を聞きながら「一人減ったが、もうすぐまた一人出てくる。今度は男だといいたが。」(SH, pp.94-5)と言う、この34才のアフリカーナに、少佐は一瞬強い憎しみを抱いたほどである。「2人の子供でも重荷に感じている」(SH, p.83) 少佐にとって、Van 一家の如き悲惨な境遇で、更に子供を持つなど、思いもよらなかったからだ。

この小説で最も印象的なのは、少佐の呆れるほどの人の好き、心根のやさしさよりも、むしろ Van Heerden というアフリカーナの、何者をも憚ることのない傲慢さ、過去は振り返らず明日をのみ見つめていこうとする、したたかさである。彼のようなタイプの人間には、黒人たちと Van の板挟みになった少佐の苦労、或るいは〈第二の小屋〉建設に絡む、少佐の苦悩など、決して理解できないであろうし、そもそもそのようなことで悩むことすら、思いもつかないであろう。たかだか、6人でかかればわずか1日で完成してしまう、小屋である。しかし、その小屋をめぐる展開される、少佐・アフリカーナ・黒人という、三者三様の意識と行動。この小説の結末を見る限り、変わったのは少佐だけである。黒人たちも Van も、何の迷いも悩みもなく、今までと同じようにこれからも、生きていくであろうと思われる。

アフリカという土地では、人間はやさしくては生きてゆけないのであろうか。これは、読む

者の心に、人間の善意に対する懐疑と次に深い絶望の念とを起こさせるこの小説の、テーマであると同時に、心やさしい人間であるが、失敗続きの不遇の後半生を送り、アフリカの地で死んでいった父親の姿を少佐に托した Doris の、怒りを込めた問いかけでもあろう。

彼女は先述の Roy Newquist とのインタビューの中で次のように語っている。

アフリカでは農場を経営する白人は、その広大さに隔てられ、互いに孤立した生活を送ることを余儀なくされます。このため、英国の社会でなら全く普通であろう人々が、よその土地でだったら決してしないような、狂気じみた常軌を逸した振る舞いをするようになってしまうのです。¹⁰⁶

これが、黒人に対する白人の傲慢・非道な態度をさしていることは、明白であろう。彼女の指摘をまつまでもなく、普通の社会に生き、健全な精神をもった人間なら誰でも、暴力を否定するであろうし、まして謂われなき人種的偏見に基づいた、黒人への虐待など、支持する者はいないであろう。しかし、このような健全な精神——互いに人格を尊重し、信頼感をもって社会生活を営もうという——は、アフリカという土地では通用しないのではないだろうか。読者にそんな疑念を感じさせずにはおかない“*The Second Hut*”は、アフリカに於ける白人の立場・苦悩を、謂わゆる〈暴力〉とは異なった面から捉え、異民族が共存することのむつかしさを、端的に描き出している。

IV

農場のことで頭がいっぱいの男たちに比して、その妻たちの生き方はどうであろうか。男たちは、その生活の全時間、全エネルギーが農場に向けられており、彼らの関心事はすべて、〈現在及びきわめて近未来の農場〉に限られている。経営手腕の有無を問わず、すべて男たちは仕事に生きている。「農場のこと以外、彼の頭の中には何もない」¹⁰⁷のだ。喜びも、悲しみも、悩みすらも、農場に関わるものであった。“*The De Wets*

Come to Kloof Grange”に描かれる Gale 少佐の姿は、このような仕事を生き甲斐にしている男たちの典型と言える。「彼にとっては、毎日が労働日であり、怠惰を忌み嫌う彼は、日曜日でも何かしら雑用を探し出しては、働くのだった。」(DWC, p.110) 妻が暑い日射しを避けて、午後の昼寝を楽しんでいる間も、彼は「農場の遠くの方まで出かけて行って、家畜の様子を見回る」(DWC, p.110)のである。早朝から日没まで、昼食を取りに帰宅する時以外、1日の大半を農場で過ごし、時には夕食もそこそこに、深夜まで仕事の打ち合わせに没頭する。こんな男たちの姿は、処女作 *The Grass is Singing* 以来、多くの *African Stories* に描かれてきた、ひとつの類型と言える。

「男たちが農場のことについて議論している間は、ただ黙って座っているだけというのが、慣例となっていた」(DWC, p.115) 女たちにとって、何が生き甲斐だったのであろう。

“*Old John's Place*”では、時折開かれるパーティにうつつを抜かす婦人たちの姿が、ひとりの少女の眼を通して映し出される。この、「幼児といっしょにベッドに押し込まれるには年取りすぎ、パーティに加わるには幼すぎる」¹⁰⁸ 13才の少女は、その年令にふさわしく、あふれるほどの好奇心と、実に冷ややかな眼とをもって、パーティに於ける大人たちの、生態を観察するのである。「ケイトは、パーティが第2段階に入ろうとしているにちがいないと判断した。そうなれば、彼女は今いる所にじっとしていなければいけない。やがて第3段階に入るのは分かりきっているのだから。」(OJP, p.156) 第2段階とは、それまで互いに離れて固まっていた男女の群れが、混ざり合い、大きなひとつの輪になって、おしゃべりやダンスに興じるようになること。第3段階とは、厳然と保たれていたファミリーという構成単位が崩れ、男も女も自由に好きな相手と時を過ごす、謂わば不倫な雰囲気支配する段階である。殆ど夜を徹して催されるパーティは、アフリカに移住してきた者にとって、殊に没頭できる仕事を持たない女たちにとって、おそらく唯一の楽しみだったのであろう。

Martha Quest にも、農場での暮らしを嫌い、独立独歩の精神に燃えて、町にやってきた主人公 Martha がボーイフレンドに誘われて足繁くダンス場に通う様が描かれる。⁽⁹⁾ 夕方仕事を終えると、着更えてダンス場へ。そしてアルコールと軽食を口にするのみで、転々と場所を変えながら、仲間と夜を過ごす。明け方近くに下宿へ戻り、仮眠の後出勤。このような Martha の日常生活が描かれるのだが、とり立てて大きな夢も、希望も持たず、無軌道な生活を送っている白人の若者たちの生態が、Martha の動きとともに、綿々とつづられてゆく。享楽に身を任せている、自堕落な〈子供たち〉の姿は、パーティの第3段階で破目をはずす大人たちの、投影でもあろうか。Kate が大人たちの振る舞いを見て、「あたかも、昼間の生活からヴェールがゆっくりと外されて、もうひとつの真実——赤裸々で粗暴な——が、現れたかの如く」(OJP, p.156) 感じた、そのヴェールの着脱のタイミングを、子供たちもしっかり身につけていくのであろう。

“The De Wets Come to Kloof Grange”の Gale 夫人の場合をみてみよう。妻のことなど殆ど念頭にない、仕事人間の夫との静かな生活の中に、哉る日突然闖入してきた若いアフリカーナ夫婦。彼らの出現により、一見平穏無事で、充足しているかにみえていた Gale 夫人の、寂しい孤独な姿が、浮きぼりにされてゆく。

4人の育ち盛りの子供を抱えていた頃は、夫婦の間には常に、未払いの負債を抱えているのにも似た、居心地の悪さがあった。今では彼らは友人であり、互いに相手のことは気にならなくなった。彼が彼女をもはや愛してはいないということは、彼女にとって何と気楽なことだったろう。……年を取るということにも利点はあったのだ。(DWC, p.106)

彼女は自分の現在の生活に満足気である。昔は夫によく不満を訴えていたが、今では「孤独を愛するようになっていた。」(DWC, p.106) 若いアフリカーナ夫婦が農場に来ることになり、話し相手ができて良いという夫の言葉に対する、彼女の反応は次のようである。

どうして、私の生活の中に他の女性を入れ

なくちゃいけないのかしら。男の場合は、ただ一諸に働くだけ、それで済むのに。夫は、その男と友だちにならなくてもいいのに。だけど、妻の場合は、孤立した農場に2人っきりの女同士ということで、2人がいつも一諸にいるのが当然と思われてしまうなんて。(DWC, p.109)

あまりにも長い間、常に自分と他人——たとえそれが夫であっても——との間に、距離を置いて暮らしてきたために、彼女には自分の世界を守ろうという思いが、ひと一倍強かった。徹底的に自分好みに仕立て上げた、維持管理にひどく手間と金のかかる、イギリス式庭園で過ごす時間。また、200年前の英国製家具に囲まれた居間で、30年来毎週便りを交わしている、英国の友人からの手紙を幾度も読み返し、追憶に耽ける時間。それは完全に彼女だけの世界だった。一面識もない人たちのことや、イギリスの天候や政治のことばかりが書かれた手紙は、彼女を謂わば〈非現実の世界〉へと誘う役割を果たしている。

彼女が現実を直視することを無意識のうちに恐れ、〈非現実の世界〉へと逃避して、生きている人間であることを、最も端的に示すと思われる文を、次に引用しよう。

① 迫り出した岩場のベンチに腰を下ろしていると、太陽の熱に温められ、むせ返るような木々の匂いや、蒸れた川水の匂い——それは、旺盛な活力に充ちた自然の、くらくらとしびれるような匂いであった——が、彼女の鼻先を襲ってきた。しかし、彼女はそれらの匂いも、そして川も、無視していられるようになっていた。ただ、彼方の山々だけを見ていた。「あの山は、私だけのものだわ」——そう、彼女は心の中で思うのだった。(DWC, p.111)

これは、崖の上のベンチに腰かけて、遠くの山に見入って何時間も過ごすという、数年来の彼女の日課について語った文である。この時、彼女は決して川やその周辺には目を向けない。それらは心の中で抹殺してしまうのである。何故なら、それらはここがアフリカだという現実を、彼女にまざまざと思い知らせるからだ。眼下の川に水を飲み現れるワニや豹は、黙殺し、ひ

たすら、雲が流れ青く霞に包まれた遠くの山々に、視線を投げ続ける Gale 夫人。

「流行遅れの不格好な青い絹の服を着、ペしゃんこの胸にロケットをかけ、青い眼を値踏みするかのように細めて、冷ややかな微笑を浮かべる中年の英国女性」(DWC, p.113)これが、18才のアフリカーナ、De Wet 夫人の眼に映った、Gale 夫人である。De Wet 夫人というフィルターを通して呈示される Gale 夫人の姿は、万事に気取って、勿体ぶった英国女性であり、隔通のきかない、それでいて体裁にこだわるその言動は、滑稽さと哀れみをすら、感じさせる。

先に引用した〈お気に入りの場所〉で、Gale 夫人と De Wet 夫人の交わす会話は、この2人の生きる世界の違いを、鮮かに示している。「私の山をお見せするわ」と言って、Gale 夫人が例の岩場へ案内すると、De Wet 夫人は「まあ、私の川だわ」と叫んで、身をのり出して眼下の川を見つめる。彼女は、遠くの山など見向きもしない。毎朝川へ出かけ、流れに足を浸し、時には魚釣りも楽しむのだと、眼を輝かせて語る De Wet 夫人に比べると、Gale 夫人が如何に己れを、〈現実〉から隔離した世界に置いているかが、一層鮮明になるのである。

V

Doris の作品には圧倒的に女を描いたものが多い、という印象を強く受ける。*The Grass is Singing* では孤独な環境の中で精神を崩壊させていく若い女性が、そしてアフリカを舞台にした数々の短篇では無為に日々を送る女たちの姿が描かれる。彼女の描く男たちは、女たちや子供たちに比べると、迫りに欠ける感が否めない。これは今までずっとみてきたように、男たちには農場経営という、ずっしりと手応えのある仕事があり、彼らについては、いつも〈現実〉に追われ忙しく動き回る姿しか描かれないことが多い、ためであろうと思われる。彼らは皆、目前に迫ったトラブルへの対応に追われている。彼らには悩みなど抱えている暇はない、と言ってもよい。仮に悩みがあったとしても、それは

すぐに決断を迫られる、現実的な類いのものである。黒人とアフリカーナの間で挟まれて、良心的に悩み抜いた Carruthers 少佐の場合ですら、彼の悩みは、小屋の火事→破産→帰国という現実によって、否応なしに解決されてしまうことになる。

これに比して、女たちの生活はどうであったか。彼女たちは農場経営には一切関与せず、家の中のことは、黒人の召し使いに指図をするだけでよい。それも男たちのような、自然に大きく左右される、日々変化する戸外での仕事と異なり、毎日決まりきった手順の連続である。彼女らの生活には、目新しいことなど何もない。緊張とか決断を迫られるようなことは、何もないのである。現実的な手応えのあるものと言え、精々庭いじりか、パーティの準備くらいのものであろう。

Doris は、アフリカという哉る意味で特殊な環境ばかりでなく、都会の真っ只中を舞台に、己れを見失ってしまい、自己のアイデンティティを見出し得ないで、狂気に落ち込んでゆく女の姿も描いている。‘a failure in intelligence’⁽²⁰⁾ を扱った、「自分でも気に入っている」と彼女が語る“To Room 19”⁽²¹⁾ では、都会に生きる聡明で有能な女性 Susan の、自殺に至るまでの心の軌跡が、語られてゆくのであるが、何故 Doris の描く女性は、これほど皆 Break-down してしまうのであろうか。男たちの精神は崩壊しないのに。

Doris の描く女たちの Break-down の原因のひとつは、女たちが空想的な愛に没入しすぎることにあるのだと、A. B. Markow は指摘する。「しかし彼女らにはそれが幻影にすぎないことが分かっており、そのために彼女らは不安に陥り、ノイローゼになるという代償を払わされるのだ」⁽²²⁾と、Markow が述べているように、現実への対応に追われ、多忙な男たちに比べ、女たちの生活は実に非活動的であり、彼女らはさまざまな幻影にしがみついて生きているようである。Carruthers 少佐の妻は何年も寝たきりの病人だが、医者に言わせると、どこも悪くない、

ただ本人に良くなろうという気がまるっきりないだけだ、ということである。彼女は自分が置かれている現実を目を向けることを拒否し、過去を懐かしみ、回想の世界だけに生きている女なのである。Gale 夫人は自分ばかりでなく、夫をも空想の世界に閉じ込めようとする。現実の夫はすっかり太ってしまい、昔日の面影はまるでない。

太くなった首の上に、チョココンとのっている小さな丸い顔。臀部もでっぴりと大きくなり、歩く度に揺れた。ゲイル夫人はショックを受け、懸命にそれらを記憶から払いのけようとした。彼女には昔の夫の姿が焼きついており、それが壊されることは許せなかった。(DWC, p.105) 謂わば、女たちの生活は〈虚〉の中で営まれている。自分の中で何かが崩壊し始めていることに気づき、救いを求めた Susan が自由がないと訴えた時、彼女の夫は、Susan には7時間というフリータイムがある(彼女は結婚を契機に専業主婦となった)けれど、自分には全くないと言う⁽²⁾。男たちが常に社会の第一線で、〈フリータイムなしで〉生きねばならないのに対して、女たちは〈フリータイムがありすぎる〉ために、虚構の世界を自ら創り出してしまうことになったのだと言えよう。男たちの抱く悩みと違って、女がいったん抱え込んだ悩みには、決着点というものが無い。何故なら、それは現実起因する悩みではあっても、豊富なフリータイムのために、彼女の頭の中で純粋培養され、増幅していった悩みだからである。

結び

アフリカという環境は、以上にみてきたように、人間の生き方を類型化してしまうようである。男は生計を立てるための仕事に追われ、肉体を働かすことで手一杯という生活を送り、女は現実とは遊離した〈虚〉の世界で生きるというのが、その各々のパターンである。そして、Doris はこのような男女の生き方の類型を、都会を舞台にした場合でも、十分に生じ得るものと考えた。彼女がアフリカの地で知悉した〈虚〉

の世界に生きる女たちの姿は、きわめて有能なビジネスウーマンであった Susan が、結婚後主婦専業の生活の中で自己のアイデンティティを見失ってゆく姿と、根本的には同一のものである。常に流動している、刺激的な外界(=社会)との接触をもたない限り、我々の誰でもが Gale 夫人になり得、Susan になり得るのだと言える。

【注】

- 1) James Gordin, *Postwar British Fiction* (University of California Press, 1963), p.65.
- 2) Doris Lessing, *African Stories* (Simon & Schuster, 1981), p.6.
- 3) Paul Schlueter (ed.), "Interview with Doris Lessing by Roy Newquist," *A Small Personal Voice* (Random House, Inc., 1975), pp.45-60.
- 4) Florence Howe, "A Conversation with Doris Lessing," *Contemporary Literature*, 14 (Autumn 1973), p.420.
- 5) "An Interview by Jonah Raskin," *A Small Personal Voice*, p.66.
- 6) "My Father," *A Small Personal Voice*, pp.83-93.
- 7) *ibid.*, p.91.
- 8) "Afterword to *The Story of an African Farm* by Olive Schreiner," *A Small Personal Voice*, p.104.
- 9) Doris Lessing, "A Mild Attack of Locusts," *The Habit of Loving* (New American Library, Inc., 1976), p.113. 以下、同作品からの引用はすべて文中にて、MAL と略す。
- 10) 『ミリオーネ全世界事典』第11巻 p.390。(学習研究社)
- 11) "The Second Hut," *African Stories*, p.93. 以下、同作品からの引用はすべて文中にて、SH と略す。
- 12) "The Pig," *African Stories*, p.33. 以下、同作品からの引用はすべて文中にて PG と略す。
- 13) E. H. ブルーケス著 鈴木二郎訳『アパルトヘイト』 p.19。(未来社)
- 14) "Afterword to *The Story of an African Farm* by Olive Schreiner," p.103.

- 15) "My Father." 参照
- 16) "Interview with Doris Lessing by Roy Newquist,"
pp.46-7.
- 17) "The De Wets Come to Kloof Grange,"
African Stories, p.106. 以下、同作品からの引用はすべて文中にて、DWCと略す。
- 18) "Old John's Place," *African Stories*, p.155.以下、同作品からの引用はすべて文中にて、OJPと略す。
- 19) Doris Lessing, *Martha Quest* (New American Library, 1970), part 2 & part 3.
- 20) Doris Lessing, "To Room 19," *Stories*.
(Random House, 1980), p.396.
- 21) "Interview with Doris Lessing by Roy Newquist,"
p.54.
- 22) A. B. Markow, "The Pathology of Feminine Failure in the Fiction of Doris Lessing,"
Critique : Studies in Modern Fiction, 16, No.1
(1975), p.92.
- 23) "To Room 19," p.408.